

〈特別寄稿〉

イギリス・ロマン派詩人ロード・バイロンとニューステッド・アビィ

# 田吹 長彦

イギリス・ロマン派の代表的な詩人ジョージ・ゴードン・バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)がこの世に生きたのは36年間である。1812年3月10日に長編詩『チャイルド・ハロルドの巡礼』(Child Harold's Pilgrimage,以下『チャイルド・ハロルド』と表記)第1編・第2編を出版して一躍名声を馳せた。その12年後にギリシアのミソロンギで客死した。彼が先祖伝来の館ニューステッド・アビィ(Newstead Abbey)を初めて訪れたのは、

1798年8月(10歳) のある日、最後に訪れたのは1814年11月17日(26歳)である。同時代の詩人P. B.シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) が『アドネイス』 (Adnais)第30連3行で語っているように「永遠の放浪者」 (The Pilgrim of Eternity)であった彼は、常に館に居住していたわけではない。少年期初期のわずかな時期に滞在し、その後は折りに触れて訪れて滞在する程度のものであった。この時期のバイロンの略歴とニューステ

ッド・アビィに関係する詩を紹介して、イギリス人貴族の 館と庭園の背景の一端を見ることにしたい。

イングランド中北部、ロンドンの北西196キロのところ にノッティンガムがある。ロビンフッドで有名なシャーウ ッドの森や小説家D. H. ロレンス (David Herbert Lawrence, 1885-1930) 縁の地としても知られている。 ノッティンガム市からマンスフィールドに向かうルートA 60を北に20キロほどのところにニューステッドがある。 122~クタールというこの広大な地所の中にニューステ ッド・アビィがある。「ニューステッド」は「新しい場所」、 そして「アビィ」とは「大修道院」の意である。現在この地 所と館はノッティンガム市の管理下にある。地所の中に は芝地の広大な公園、庭園、森、農地、湖、池、そして 川がある。館にはバイロンの寝室を含むさまざまな遺品 が展示されている。「日本の間」や「日本庭園」もあるが、 これらのものはバイロンがこの世を去ったあとにこの地 所を購入したハロウ校時代の学友トマス・ワイルドマン (Thomas Wildman, 1787-1859)が造ったものである。(ワ イルドマンは1817年12月初旬に購入した時、少佐、の ちに大佐となった軍人である。分割払いで利子を含め て97,972ポンドであった。) ルートA60沿いにある守衛 用建物付の正門前にはバスの停留所があり、待合用 のベンチの傍には数百年は経たと思える巨大な老木 が立っている。この正門を抜けて1.6キロのところに古色 蒼然たる大修道院の建物がある。そこから反対側に2.5 キロ行くと、同じく守衛用建物付の裏門に着く。

バイロンの家名の由来はフランスのノルマンディー地方のナント(Nantes)の近くのブロン(Beuron)とされている。1066年に征服王ウィリアム1世に従ってイギリスに渡った一族は、王から多大な領地を与えられた。イギリスでの始祖ラルフ・ド・バラン(Ralph de Burun)は1086年にはノッティンガムを中心とする地方で広大な土地の地主となっていた。1170年頃にヘンリー2世によって聖母マリア小修道院(Priory)として創建されたニューステッド・アビィは、時代の流れとともに増改築されて大修道院(Abbey)となった。しかし宗教改革の時代、1539年にヘンリー8世が行った修道院の解散・財産の没収によって荒廃した。1540年に、ヘンリー8世は功績のあ

ったコルウィック(Colwick、ノッティンガムの東4キロのト レント川河畔にある)のジョン・バイロン(John Byron, c.1487-1567) にニューステッド・アビィの建物と領地 304~クタール(当時) とその周辺の土地を810ポンドで 払い下げた。1643年、第5代目の所有者であったジョ ン・バイロン(John Byron, 1<sup>st</sup> Baron, c.1598-1652) は国 王チャールズ1世を支援した功績によって男爵の爵位 を与えられ、初代ロード・バイロンとなった。詩人バイロ ンの祖父は、奇行と蛮行で知られ「悪殿様」と呼ばれた 第5代バイロン卿(William Byron, 5th Baron Byron, 1722-98) の弟ジョン・バイロン(John Byron, 1723-1786) で、海軍提督の地位まで上り詰めた。航海中に何度も 嵐に遭遇したこともあって「時化のジャック」 (Foulweather Jack) と呼ばれた。その長男として生まれ たのが、詩人バイロンの父親ジョン・バイロン(1756-91) である。父親は近衛連隊の士官で、アメリカ独立戦争 に陸軍大尉として出征したこともあった。ハンサムでは あったが放蕩生活による莫大な借財と無頼な行動によ り「狂人ジャック」(Mad Jack) と呼ばれていた。彼の最 初の妻カーマセン侯爵夫人(Amelia D'Arcy, Marchioness of Carmarthen, 1754-1784) は他界したある貴 族の一人娘で、かなりの財産を相続していたこともあっ て、ジョン・バイロンは彼女を誘惑した。やがて彼女は 夫から離婚を言い渡され、ジョン・バイロンと共にスキャ ンダルと債権者から逃れるためにフランスに渡った。 1783年1月、彼らの間に女児、すなわち詩人バイロンの 異母姉オーガスタ・メアリ(Augusta Mary Byron, 1783-1851) が生まれた。カーマセン侯爵夫人は翌年1 月に他界した。バイロンの父親はイギリスに戻り、1785 年春にバースの舞踏会場で当時20歳であったキャサリ ーン・ゴードン(Catherine Gordon, 1765-1811) に出会 った。スコットランドの高地地方北西部の僻地ギクト (Gight) に祖先を持つゴードン家の家督娘であった。 彼女の祖先はスコットランド王ジェイムズ1世(スチュア ート朝の創始者)の娘アナベラ・スチュアートにまで辿る ことができる。同年5月にバイロンの父親は借財の穴埋 めと遊興を続けるために彼女と結婚したが、すぐに彼 女の資産を浪費し、さらに借財を重ねて債権者たちか

ら追われる身となった。1787年9月にフランスに逃げ、キャサリーンも当時世話を任されていた4歳のオーガスタを連れて彼のあとを追ったが、妊娠した上に異国になじめず、オーガスタと共に帰国した。オーガスタをその母方の祖母に預け、ロンドンのホルズ・ストリート(Holles Street) 16番地の建物裏手2階の借間での貧しく倹しい生活を強いられた。詩人バイロンは1788年1月22日にこの借間で生まれた。今では通りに面した店のショーウィンドウの間の壁面にこの事実を示す小さな銘板がはめられている。彼は生まれつき右足に内反足という障害を持ち、生涯歩行が不自由な生活を強いられることになった。

1789年7月、1歳半の乳児であったバイロンは母親に 連れられてロンドンを去り、スコットランド北東部の北海 に面する港町アバディーンに移り、クウィーン・ストリート (Queen Street) の小さな借家に住むことになった。母 親は生活苦と精神的不安定のため、バイロンを溺愛す る反面、抑制できないほど急に怒ったりもした。父親は 1791年8月にフランス北部の町ヴァランシェンヌ (Valenciennes) で34歳の若さで他界した。自殺であっ たとも言われている。バイロンが3歳のときのことである。 バイロンには遺産相続はほとんどなく、幼年時代は困 窮状態で過ごした。父親がフランスで客死したという知 らせを受けたあと、母子はアバディーンのブロード・スト リート(Broad Street) 64番地の借家に移った。1794年7 月、第5代バイロン卿「悪殿様」の孫ウィリアム・バイロン (William Byron, 1772-1794) が22歳の若さで地中海 北部のコルシカ島のカルヴィ包囲攻略(ネルソンはこの 戦いで右目の視力を失った)で戦死し、当時6歳であっ たバイロンが爵位継承予定者になった。同年彼はアバ ディーンのグラマー・スクールに入学した。中流階級以 下の学友がほとんどで、バイロンは貧しくはあったが精 神的な糧を得た。旅行書、歴史書、小説、神話・伝説 などの多くの書物を読み、特に聖書は何回も精読した という。アバディーンの町の南縁にはディー川、北縁に はドン川が流れ、東側には北海に面する大きく湾曲し た砂浜が広がっている。バイロンはこれらの自然を遊び 場所にして育っていった。北国のひなびた町と自然の

中で過ごした少年の日々の記憶は生涯バイロンの脳 裏から消え去ることはなかった。今日でもアバディーン にはバイロン母子が過ごした通りが残っている。グラマ ー・スクールの位置は変わってはいるが、正門の奥に は校舎を背景にした大きなバイロン像がある。

1798年5月21日、大伯父である第5代バイロン卿が 他界し、バイロンは第6代バイロン卿となった。8月にな って母親はアバディーンの借家の家財道具を売却して 旅と喪服の費用を捻出し、10歳の息子と乳母メイ・グレ イを連れてノッティンガムのバイロン家伝来の館ニュー ステッド・アビィに向かった。荒れ果てた館の前では事 務弁護士兼代理人ジョン・ハンソン(John Hanson、?-1841) 夫妻が待ち受けていた。バイロンの将来は激変 したかに見えたが広大な地所と館、そして家具のほと んどは債権者に差し押さえられていた。しかし彼は一 族伝来の紋章に刻まれた家訓「バイロンを信じよ」 (Crede Byron)を見て誇りに思った。館を修復するため 一時ノッティンガムの町の借家に住んだが、その間に バイロンはハンソンにニューステッド・アビィの近くのア ンズリィ・ホールに住むクラーク夫人を紹介され、その 娘で2歳年上の少女メアリ・チャワース(Mary Chaworth) に恋心を抱いた。彼女はすでに婚約中の身であった。 またバイロンの先祖「悪殿様」は、ロンドンの居酒屋で 狩猟の獲物の保護規則をめぐって彼女の大伯父と喧 **嘩になり決闘し、射殺したという因縁つきのものであっ** た。町医者によってバイロンの不自由な右足の治療が 施されたが、成果はかんばしくなかった。1799年7月に はロンドンを訪れて名医に診てもらったり、ハンソンによ って将来の学費の調達の工面がなされたりしている。9 月になりロンドンのダリッジ(Dulwich)にあったスコットラ ンド人グレニィ博士(Dr Glennie) の経営する小さな学 校に入り、1801年のイースターまでそこで学んだ。1800 年夏の休暇にノッティンガムに戻ったときに従妹のマー ガレット・パーカー(Margaret Parker) との恋に陥り、恋 心を詩にうたった。

1801年4月にバイロンはロンドンの名門ハロウ校 (Harrow School) に入学した。ロンドン中心部から北西に18キロの村の丘の上に位置していた。現在では地下

鉄メトロポリタン・ラインのハロウ・オン・ザ・ヒル駅から徒 歩で10分程度坂道を上ったこところにある。卒業生とし ては英国首相のチャーチル(Sir Winston Leonard Spencer Churchill. 1874-1965)、インド初代首相のパン ディット・ネルー(Pandit Jawāharlāl Nehru, 1889-1964) といった著名な政治家たちもいる。バイロンは真面目さ に欠けいつも悪ふざけをする怠惰な生徒であったが、 何人かの友達と親交を結んだ。歴史、小説、伝記、詩、 旅行記、哲学、神学、法律、地理などに関する書籍を 読み、流暢な筆致で詩を書き、演劇や雄弁術(当時バ イロンは政治家になる夢を持っていた)の才能を伸ばし ていった。学校に隣接するセント・メアリ教会の墓地の 崖端に貴族ジョン・ピーチィ(John Peachey) の石棺が あり、彼はその上に座って眼下の遠景を楽しみつつ読 書することが多かった。現在も石棺の横にこの事実を 伝える記念碑が残っている。

異母姉オーガスタに初めてあったのは、ハロウ校在 学中のクリスマスの休暇であったとされている。1803年3 月、ニューステッド・アビィの館はハンソンの世話でヘン リー・エドワード(Henry Edward, 第19代グレイ・ド・ルー シン卿、当時23歳)に年50ポンドの家賃で貸し出された。 ハロウ校在学中は、休暇にはノッティンガムに戻り、貸 家にしていた館や母親が借りたサズル(現地発音、 Southwell)の邸宅バーゲイジ・マナー(Burgage Manor) に滞在した。アンズリィ・ホール(Annesley Hall) のメア リ・チャワースを足繁く訪ねたり、バーゲイジ・マナーの 向かいの館に住むピゴット家のエリザベス(Elizabeth Pigot、バイロンより5歳年上)と会ったりして恋心を燃や した。アンズリィ・ホールをある晩訪れたとき、偶然彼は メアリがメイドに向かって「何ですって!このわたしがあ の足の悪い少年を好きですって!」と言うのを耳にし、 さらに1805年には彼女が他の男性と結婚したことで大 きな衝撃を受けた。彼女は理想の女性として生涯忘れ ることのできない人となった。同年7月にケンブリッジ大 学トリニティ・カレジを訪れて入学の許可を得た。8月に は名門イートンとのクリケットの試合にメンバーとして加 わり敗退している。その直後にバイロンはハロウ校をあ とにした。学び舎を去る前に、「フォース・フォーム・ル

ーム」(Fourth Form Room) と呼ばれる教室の分厚い 板壁に自分の名前を刻みつけた。今もこの落書きは残っている。

1805年10月24日、バイロンは17歳でケンブリッジ大 学トリニティ・カレジのネヴィルズ・コートの南西の学寮 に入った。現在、カム川 (The River Cam) に面した 図書館「レン・ライブラリー」(The Wren Library) の2階 の奥に大理石で造られたバイロンの彫像がある。ドイツ の王子のように独立した気分で、年500ポンドの学費と 従者、そして馬を与えられた。「群れから引き離された 狼のように付き合いがなく孤独であった」と彼自身は語 っている。バイロンだけが怠惰で放蕩をしたように考え られているが、当時は貴族の子弟は誰もが容易に講義 や試験を免除されていた。勤勉であることをかえって蔑 む風潮が残っていたので、ハロウ校時代とは違って彼 はずっと家庭的な日々を送ることができた。友達と水泳 や乗馬を楽しみ、楽器を奏した。またカム川で泳いだり、 近くのグランチェスター村(Grantchester) まで馬で遠出 をしたりして日々を過ごした。そして多くの書物を読ん だ。「他の学生たちの放蕩に付き合っても必ず嫌悪感 を抱いた」とバイロン自身が語っていることからも、彼の 放蕩が際立って特異なものではなかったことがわかる。 しかし頻繁にロンドンに出ては、浪費して高利貸しに借 金することが多かった。それは次第に莫大なものになっ ていった。

1806年2月5日、新学期が始まっても授業には出ず、ロンドンに出掛けて観劇を楽しみ、ボンド・ストリート13番地のヘンリー・アンジェロ(Henry Angelo, 1756-1835)とジャクソン(John Jackson, 1769-1845)のところを訪れてフェンシングやボクシングを習い、その他の良からぬ放蕩に没頭して、オーガスタ、ハンソン、その他の知人に金の無心をした。不行状を母にたしなめられると、彼は「貴顕紳士の改良をイギリスの大学でするなんて、いいかい、不可能なんだ、その考え自体が滑稽で馬鹿馬鹿しいんだ」と遣り返した。ケンブリッジには落ち着かず、サズルを訪れるなど各地を旅した。そしてたまにケンブリッジにいるときは、講義出席や研究より詩作に多くの時間を費やした。11月、彼はノッティンガムで詩集『偶

作詩集』(Fugitive Pieces) を私家版として出版した。

1807年1月22日に彼は19歳になり、やがて『折々の詩』(Poems on Various Occasions) を私家版として印刷した。6月には詩集『怠惰の時』(Hours of Idleness)を出版したが、この中には初期の多くの詩が含まれ、きわどいと思えるような詩は削除してメランコリックでセンチメンタルな詩が加えられていた。ケンブリッジを去ろうと決心するが、やがてジョン・カム・ホブハウス(John Cam Hobhouse, 1786-1869) とチャールズ・スキナー・マシューズ (Charles Skinner Matthews, 1785-1811) という親友を得て思いとどまった。熊を購入して学寮の自室の近くの小塔で飼い慣らしながら、時折散歩に連れて行くという生活を始めた。

1807年11月末に彼がケンブリッジの学寮で書き留めた『読書リスト』(Reading List)には「15歳になるまでに4千冊以上の小説を読んでいた」と記録されている。このリストには国内外の古典から19世紀初頭にいたる広範な分野の書籍があげられている。ジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)とアレクサンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)の風刺・機知に強烈な興味を持った。また、キングズ・カレジの指導教官フランシス・ホジスン(Francis Hodgson, 1781-1852)と知己になり、ジョン・ドライデン(John Dryden, 1631- 1700)についても熱く語り合った。この年のクリスマス休暇をロンドンで過ごし、そのあと時折ケンブリッジを訪れはしたが、翌年夏、修士号取得のためにケンブリッジを訪れたのを除いて二度と戻ることはなかった。

1808年1月初めにロンドンのホテルを根城にして生活した。1月20日、遠縁にあたるロバート・チャールズ・ダラス(Robert Charles Dallas, 1754-1824)という人物から手紙が届き、その直後に彼はバイロンを訪ねてきた。ダラスは長編詩『チャイルド・ハロルド』の出版に大きく関わりを持つことによって、バイロンを傑出した文学者・詩人として世に出す重要な役割を果たした人物である。バイロンのロンドンでの生活は、浪費による借金とさまざまな女性たちとの一時的な関係が続き、ひどく健康を害するほどであった。やがて健康の回復を見て6月16日にロンドンを離れて、ブライトンに向かい、水泳を

楽しみ、7月4日にはケンブリッジに行って学位を得た。 ウィリアム・ハーネス(William Harness, 1790-1869) あて の手紙の中でバイロンは、「アルマ・マータ[母校・慈母 の意]は僕にとっては継母であった。この醜い老女が僕 にM.A.の学位をくれたのは、そうせざるを得なかったか らだ。ケンブリッジ出身の高貴な人間は何たる道化芝 居を演じねばならないのだろう」と語っている。再びブラ イトンに戻り8月まで過ごしたあと、9月初旬にホブハウ スと共にニューステッド・アビィに戻った。館を貸してい たヘンリー・エドワードは退去していたが、彼の管理が 悪く荒廃状態であったために修復をしていた。バイロン は、館に「悪殿様」の時代から仕えていた老人ジョー・ マリ(Joe Murray) を家臣たちのまとめ役にした。従者の 中にはウィリアム・フレッチャー(William Fletcher, 1773-1841?) や少年ロバート・ラシュトン(Robert Rushton, c1795-c1830) たちがいた。ホブハウスと共に湖で 泳ぎ、乗馬を楽しんだ。結婚してマスターズ夫人となっ たメアリ・チャワースはアンズリー・ホールに彼らを夕食 に招いた。バイロンは苦い思い出を噛み締めていた。

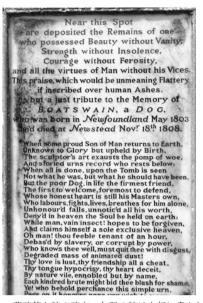
1808年11月10日、愛犬ボウスン(Boatswain、「軍艦の掌帆長」の意)が自分の目の前で死ぬのを見て、バイロンは悲しみのどん底に落とされた。ボウスンは従順で利口で泳ぎがうまく、館に展示されている肖像画によると、黒毛の大型犬で、首回り・四肢・腹部は白毛のニューファンドランド犬であった。1803年5月にバイロンが手に入れた時はまだ子犬であった。

昔はニューステッド・アビィの館の北西端(正面左手)に教会堂があったが、ヘンリー8世の時代に破壊されて、今は正面部分のみが残っている。その背後(南側)のかって教会堂の建物があった場所は広い芝地になっていて、その南に大きな池「イーグル・ポンド」(Eagle Pond)がある。かつて教会堂の中央祭壇があった位置にボウスンの大きな記念碑(墓石)がある。これは1808年12月から1809年1月の冬期に、バイロン自身が建立したものである。この記念碑には彼自身が書いた墓碑銘と詩の形式の碑文が刻まれている。墓碑銘を原文のまま引用する。

Near this Spot
are deposited the Remains of one
who possessed Beauty without Vanity,
Strength without Insolence,
Courage without Ferocity,
and all the virtues of Man without his Vices.
This praise, which would be unmeaning Flattery
if inscribed over human Ashes,
is but a just tribute to the Memory of
BOATSWAIN, a DOG
who was born in Newfoundland May 1803
and died at Newstead Nov<sup>r</sup>. 18<sup>th</sup>, 1808.

この地点の近くに、あるものの「亡骸」が埋葬されている、 彼は美しさを備えていたが、虚栄心はなく、 力はあったが、傲慢でなく、 勇気もあったが、獰猛ではなかった、 そして、「人」の美徳を備えていたが、悪徳などなかった。 この称賛の言葉、もし人間の「遺骸」の墓碑に刻まれたら、 無意味な「お世辞」となるであろうが、 これは、ボウスンという「犬」を追悼する まさしく義にかなった賛辞である。 彼は 1803 年 5 月、ニューファンドランドで生まれ、 1808 年 11 月 18 日、ニューステッドで他界した。

バイロンは、下記に引用する『チャイルド・ハロルドの巡礼』第1編に挿入された「別れの歌」第9連でもボウスンについて言及している。彼は無類の愛犬家で数匹の犬を飼っていた。特にニューファンドランド犬とブルドッグを好んでいた。書簡の中にはボウスンの他に、「サヴィジ」(Savage)、「ブラン」(Bran)、「ファニィ」(Fanny)、「スマット」(Smut)、「マッツ」(Mutz)、「ライオン」(Lion)という犬の名前があり、これらの犬を手に入れたことや、その消息、近況などについて語っている。特にボウスンを溺愛していた。1811年9月23日付でニュース



墓碑銘と詩の碑文 左記の詩は上部に書かれている



A Landseer Newfoundland dog, the breed Byron eulogized, painted by Edwin Henry Landseer, 1856

テッド・アビィからダラスにあてた書簡の中では、この忠大に関して次のように語っている。「僕は『別れの歌』第9連を削除して別のものに換えるつもりはない。僕の犬が[生き物として]同じ部類の獣―人間―より良いものだと思う理由を持ち合わせてはいない。そして、あのアルゴスの話は伝説で作り話ということも知っている。」アルゴスとはギリシア神話に出てくる百の目を持つ巨人である。ゼウスの姉で妻である女神へラは、ゼウスがイオ(アルゴスの川の神イナコスの娘)に恋情を抱いたので、命令を下してイオを雌牛の姿に変えた。アルゴスがイオ

の監視をしている時、ゼウスの命を受けたヘルメスが笛 を吹いて彼を眠らせて殺害した。アルゴスはクジャクに 変身したとも、ヘラによってその目はクジャクの尾につ けられたとも言われている。このことから、アルゴスは 「絶えず警戒を怠らない人間、番人、あるいは監視人」 の意味に用いられる。バイロンはある時、飼い犬にアル ゴスのような役割をさせようと期待したのだが、それがみ ごとに裏切られた。また、1815年1月19日付でトマス・ム アに(Thomas Moore, 1779-1852)にあてた手紙では次 のように語っている。「犬の思い出については、僕自 身の飼い犬の雑種犬で判断する限り(最愛の犬で、こと もあろうに最も狂っていたあのボウスンはいつも除外し ての話だが)、ある一匹の犬の奴は(母系は狼なのだが)、 僕が10歳の時にはとてもなついていたのに、20歳の時 には僕を食い殺そうとしたことがある。あいつがまさにア ルゴスの役を演じようとしていると思っていた時に、僕の 乗馬用の半ズボンの尻のところを咬みちぎった。しかも、 あらゆる類の骨をやっても、これだと認めて僕に従うこと など全くなかった。だからサウジーの奴なんて恥を知れ、 ホーマーだってそうだ。四足獣[の犬]に関して僕が断じ て言えるのはこんなことだ。」

このような経験から、下記に引用する『別れの歌』第9 連の、「恐らくわが『犬』はただ徒にもの悲しげに吠え泣き、/ やがては見知らぬ者に飼われることになるのだ。/ そして、ふるさとにわれ帰り来る前、疾うにこの犬主人を忘れ、/ 会うことあらば、その場でわれを引き裂くであろう」という言葉は生まれた。

ボウスンが突然死したことでバイロンは非常に衝撃を受けたようで、1816年11月18日付でニューステッド・アビィからフランシス・ホジスンにあてた手紙の冒頭でこのことに触れて次のように書いている。「親愛なるホジスン君、ボウスンが死んだ!彼は10日に狂乱状態で息を引き取った。たいそう苦しんだが、最後まで優しい性格のままであった、近くにいた誰にも危害を加えようとすることなど全くなく一僕はあの年老いたマリ[バイロンの従僕]を除いて全てを失った。」ボウスンの死因は狂犬病

であったとされている。彼は、初めのうちは「病気の本質についてほとんど気付かなかった。だから、発作が起こっている間ずっと、何度も自分の素手で犬の口元からよだれをぬぐい去っていた」と語っている。

バイロンがいかに ボウスンを愛していたかは、彼が 遺書の中でこの犬の墓のことについてわざわざ言及し ていることからも察することができる。1809年6月14日に 署名をした遺言書の末尾で、死後自分の遺骸がボウス ンの墓のそばに埋葬されるとしても、犬の墓石は動かし てはならないと言っていること、また1811年8月12日に ニューステッド・アビィで書かれた「至急作成すべき遺 書の内容に関する指示 | の中にも自分の遺骸の埋葬と 犬の墓のことに特に触れて、「ロード・Bの遺骸はニュー ステッドの庭園の教会堂の地下納骨所に埋葬すること。 葬儀も埋葬の儀式も全く不要で、碑文も必要ない。た だ名前と享年の記載があればよい。共に埋葬されてい る犬の遺骸はそこから移してはいけない」と語っている。 ボウスンが他界して16年後(1824年)、バイロンは36歳 の若さでギリシアのミソロンギ (Missolonghi) で客死した。 その遺骸はハクナル(旧称ハクナル・トーカード Hucknall Torkard) 村のセント・メアリ・モドリン(マグダリ ーニ)(St Mary Magdalen) 教会地下納骨所の父親の 遺骸の傍らに葬られた。この村はニューステッド・アビィ の南5キロに位置する。

ボウスンの記念碑に刻まれた墓碑銘の下部には、別の碑文が刻まれている。ボウスンが他界して 10 日後に、バイロンは『あるニューファンドランド犬の記念碑に刻む碑文』(Inscription on the Monument to a Newfoundland Dog) と題する詩を書いた。全文を引用する。



When some proud Son of Man returns to Earth, Unknown to Glory, but upheld by Birth, The sculptor's art exhausts the pomp of woe, And storied urns record who rests below. When all is done, upon the Tomb is seen, Not what he was, but what he should have been. But the poor Dog, in life the firmest friend, The first to welcome, foremost to defend, Whose honest heart is still his Master's own, Who labours, fights, lives, breathes for him alone, Unhonoured falls, unnoticed all his worth, Denied in heaven the Soul he held on earth-While man, vain insect! hopes to be forgiven, And claims himself a sole exclusive heaven. Oh man! thou feeble tenant of an hour. Debased by slavery, or corrupt by power, Who knows thee well, must quit thee with disgust, Degraded mass of animated dust! Thy love is lust, thy friendship all a cheat, Thy tongue hypocrisy, thy heart deceit! By nature vile, ennobled but by name, Each kindred brute might bid thee blush for shame. Ye, who behold perchance this simple urn, Pass on – it honours none you wish to mourn. To mark a friend's remains these stones arise: I never knew but one -- and here he lies.

ある誇り高き「人間の息子」が、「栄光」によっては世間に知られず、「家柄」に支えられてこの大地に蘇るのであれば、 彫刻師がその技を用いても、華麗なる苦悩を使い果たして無駄骨折りになる。 伝説を刻まれた墓碑は、黄泉国に憩う者を記録に残す。 万事が終わったとき、その「人間」の過去の姿でなく、 彼が生前いかなる存在であるべきであったかは、墓碑を見れば分かるものだ。 しかし、この哀れな「犬」、生きていたときはこよなく固い友情で結ばれた友、 誰よりも先に主人を心から迎え、真っ先に主人を守り、

彼の誠実な心は常に主人自身の心でもあった、

ただ主人のために働き、戦い、生きて、息づかいでさえも主人のためのものであった、

栄誉を与えられないままに、あれほどの真価も気づかれずに、斃れた。

この世で持っていた「魂」は、天国で拒まれた ―

人間、虫けらのように空しき人間! こいつの方は許しを得ることを望み、

おのれだけの唯一の天国を求める。

ああ、人間よ! お前、隷属によって品位を落とし、

権力によって堕落する、一時のか弱い借家人よ、

お前をよく知る者は、嫌悪の情を持ってお前から去るに違いない、

生きた塵の、腐敗した塊である人間よ!

お前の愛情は肉欲的なもの、その友情と言えば全くの詐欺、

お前の言葉は偽善の言葉、心根は欺瞞!

生来下劣、ただ[家系による]名声だけで気高く、

同じ種類の獣のようなひとでなし一人一人が、お前に、「恥と思って赤面せよ」とのたもうこともある。 この素朴な墓碑を見る君よ、

通り過ぎよ ── この墓碑は君が嘆き悲しみたいと思う者に栄誉を与えているのではない。

僕は一人の友の亡骸の埋葬場所を示すために、この墓石を建立したのだ。

その者は僕が知り得た唯一の友 — その彼がここに眠っている。

バイロンの思想の一端を知るために、彼の全作品を読む必要はないかも知れない。彼は「四足獣[の犬]に関して僕が断じて言えることはこんなことだ」(上記参照)と、いとも簡単に語っているが、この言葉には痛烈なアイロニーが込められていることが分かる。たかが一匹の犬を追悼することによって人間世界の表裏を洞察している。ナポレオン1世がエルバ島に流されたあと、ウィーン会議が開催された。第2代ロンドンデリー侯爵カースルレー(Robert Stewart, 2nd Marquess of Londonderry, 1769-1822) はイギリスの外務大臣として出席した。バイロンは1820年1月2日付でトマス・ムアあてた手紙の中で、当時まだ生きていたカースルレーに対して次のような「墓碑銘」を書いている。(ちなみに一般的な書籍では"piss"は削除されている。)

Posterity will ne'er survey
A nobler grave than this:
Here lie the bones of Castlereagh:
Stop traveller, and piss.

後世の者たちは、これほど高貴な墓碑を 見ることなど決してないだろう。 ここにカースルレーの遺骸が横たわっている。 旅人よ、この墓の前で立ち止まれ、 そして小便をせよ。

バイロンは少年期に「英雄」ナポレオンを崇拝していた。 しかし、後になって彼を激烈に批判する。この事実は、 『チャイルド・ハロルド』第3編第36連から45連を読めば 明白である。

バイロンは第1回目のヨーロッパ大陸旅行に出掛けるために、ハンソンに旅の費用の調達を無心したが、先祖伝来の館と地所の売却は望まなかった。1808年11月末にホブハウスがニューステッド・アビィを去ったあと、12月初旬までのある日、庭園の手入れをしていた庭師が、その昔修道院であった館の歩廊の敷石を剥いで掘り出した石棺の中から最も大きな頭蓋骨を選んで、バイロンのところに持ってきた。バイロンはノッティンガムの町の宝石商に金を支払い、頭蓋骨を磨き上げさせて、「亀の甲羅に似た斑紋のある立派な」飲酒用のカップを作った。この髑髏のカップがいかなる「活躍」をしたかについては後述する。

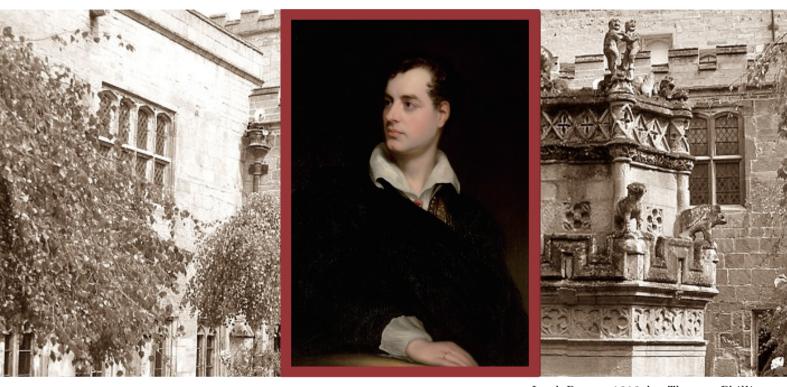
1809年1月22日、21歳の誕生日をロンドンで過ごし た。3月13日、議席を得る儀式に出席のために上院に 赴いた。当日たまたまセント・ジェイムズ・ストリートのレ ディシュ・ホテル(Reddish's Hotel) を訪れたダラスが 彼のお供として付き添った。その数日後、アレクサンダ 一・ポウプの詩風を模した風刺詩『イングランド詩人た ちとスコットランド批評家たち』(English Bards and Sco tch Reviewers) を匿名で発表して『エディンバラ・レビ ュー』(The Edinburgh Review)に反撃をした。この風刺 詩の情調はときおり下品ではあったが、明白な成功を 収め、詩人バイロンの溢れんばかりの活気は社会に伝 播していった。好意を持って受け入れられ、彼自身は 自分を酷評した批評家たちに対する鬱積した恨みを晴 らし、痛罵の逆襲を浴びせかけることができたと思った ほどであった。4月上旬、ハンソンが旅の資金調達をし ている間、バイロンはニューステッド・アビィにホブハウ スやマシューズといった親友たちを招いて乱飲乱舞の 酒宴を催した。僧侶の衣装を身につけ、酒蔵から銘酒 の数々を取り寄せ、上述した髑髏のカップを次々に回 して痛飲し、彼自身が石棺から幽霊の格好をして飛び 出してホブハウスが手にした蝋燭を吹き消すという類の 宴であった。そこには大勢の女性たちも加わっていた。

同年4月16日付でニューステッド・アビィからハンソンに手紙を出して、すぐにでもイギリスを離れなければな

らない「差し迫った」「絶対的に不可欠な」理由があることを伝え、それは債権者から逃れるためだけではないことを暗示した。すでに「5月6日出航の船の予約」は完了していた。4月下旬にはロンドンに戻りホテルに滞在していたが、資金調達は相変わらずうまくいかず、高利貸しから6千ポンド借りる交渉が滞って出発は遅れた。ホブハウスとマシューズを旅に誘うが、父親と喧嘩していたホブハウスのみが誘いに乗った。しかしホブハウスには金がなく、バイロンは1万3千ポンドの借財を抱えながら、彼に旅費の面倒を見ると申し出た。高利貸しは2千ポンドしか送金せず、運良くギャンブルで儲けたスクループ・ディビス(Scrope Berdmore Davies, 1782-1852)が4万8千ポンド融通してくれた。

1809年6月19日、バイロンはロンドンをあとにしてイングランド南西端に近い港町ファルマス(Falmouth)に向かった。同行者は親友ホブハウスの他に、従者4人であった。21日までにファルマスに到着し、ウィンズ・ホテルに滞在した。30日にポルトガルのリスボン行きの郵便船(帆船)「プリンセス・エリザベス号」(乗客は19人)に乗ったが、天候不順で逆風のために待機し、7月2日に出航した。

この日から1811年7月までの第1回目グランド・ツアーの詳細は、そのほとんどが帰国後1812年3月に出版された『チャイルド・ハロルド』第1編・第2編の中で語られることになる。バイロンの有名な言葉で、「ある朝目覚めると、有名になっていた」(I awoke one morning and found myself famous.) というのがある。『チャイルド・ハロルド』第1編・第2編は当時としては爆発的に売れた。ロンドンの街を行く貴婦人たちが朗唱したと伝えられるこの長編詩の冒頭部分は次のようなものである。バイロンは詩神ミューズに霊感を求めたあと(invocation と言う)、自分の来歴について語る。先祖伝来の館ニューステッド・アビィについての描写もある。同編第2連から第13連までの部分を、紙幅の関係で拙訳のみで紹介する。



Lord Byron, 1813 by Thomas Phillips Newstead Abbey, Cloister Garth



かつてアルビオンの島(イギリス)にひとりの若者がいた、この人物、「美徳」をもって生きることに喜びを感じなかった。 それどころか、至極下品かつ奇妙な馬鹿騒ぎに打ち興じて日々を過ごし、さらに、「夜」の眠たげな耳を陽気に騒いで悩ませた。 ああ! 実に彼は恥を知らぬ御仁であった、 酒盛りと、神を恐れぬ歓楽にいたく熱中していた。 この世で彼の気に入るものと言えば、妾連中、肉欲的な輩、 そして、貴賤の別ない、これ見よがしの無頼の飲んだくれども、 これらを除いては、これと言ったものはなかった。

その名はチャイルド(貴公子)・ハロルド。―しかし、彼の家名と 何世代にもわたる家系の起こりを述べることは、僕にはふさわしからぬこと。 ただ、知名の家系で、

昔は栄華を誇ったものとだけ言っておこう。

しかし、いかにかつて栄えたものであろうとも、

ひとりの嘆かわしき放蕩者が家名を永久に汚してしまった。

家系の由緒を司る紋章官たちが柩の亡骸の中から探しあさってくるすべてのものも、

また、美辞麗句ずくめの文章も、快いひびきをもつ虚偽の詩文も、

不徳を彩色し、罪悪を清めることはできない。

チャイルド・ハロルドは、「真昼」の陽光を浴びるように、その絶頂期の栄光にわが身をひたし、 そこで他の蠅と同じように遊び戯れた。

そして、自分の短い一生が尽きる前に、

一陣の突風が吹き来たりてわが身を凍らせ、惨めな境遇に陥るとは思ってもいなかった。

しかし、一生の三分の一も過ぎぬうちに、

「逆境」よりなお悪いものが、この高貴な身分の若者に襲いかかってきた。

この若者、嫌というほど「満足した生活」を味わい、

それから、「隠者」の悲しい庵室よりもずっと淋しく思える

住み慣れた祖国で生活することを嫌うようになった。

というのは、この若者、それまでに「罪」の長い迷路を駆け回り、

誤った行為の償いもせず、

愛する人といえば、ただひとりの女性なのに、多くの女たちに恋の吐息を漏らしていた、

しかし、彼が愛したその女性は、哀れ! 自分のものとはなりえなかった。

ああ、その女性こそ幸いなり! この男から逃れ得たとは。

もし、彼のものになっていたら、その接吻によって、あのように貞節な彼女は汚れていたであろう。

すぐに彼女の大いなる魅力を見捨てて、卑俗な肉体のよろこびに走ったであろうし、

彼女の相当なる領地を分捕り、きらびやかに浪費をきわめて生活したであろう、

そして、身を下し、誇りを捨てて、落ち着いた家庭の安らぎを味わうこともなかっただろう。

かくして、今やチャイルド・ハロルドはいたく悲観して、

仲閒の酒飲み連中から逃げ去りたいと思った。

時には心暗く、突然涙を催すけれど、

「矜恃」あるためにその滴を落とそうとしなかったと人は言う。

人を離れ、悄然と思いにくれて忍び歩き行き、

故国を去って海のかなたの国々を訪れようと心に決めた。

吐き気を催すほど歓楽を味わい、

そのため、ほとんど災いを希求するほどであった、

そして、舞台をかえるために、あの地下の黄泉の国を訪ね行こうとさえ思った。

この貴公子は先祖伝来の館を出立した。

年を重ねて威厳のある大邸宅であった。

非常に古く、ほとんど倒壊せんばかりであった、

しかし、側廊に並ぶ堂々たる柱の姿を見れば、この館にはまだ力強さが残っていた。

かつては修道院であったのだ! 今では淫蕩の館になりさがっていた!

そこには、その昔「迷信」が住んでいたのだが、

今では淫乱な女どもが歌い笑うのを人々は知っていた。

かくして、もし、昔の話が真実で、僧侶たちの名誉を傷つけるのでなければ、

この聖なる人々は、「われらの時再来せり」と思ったであろう。

しかし、狂気の限りを尽くした歓楽に浸るその時折、

チャイルド・ハロルドは人知れぬ苦痛に眉根を寄せたものだった、

あたかもある恐ろしい争いか、

期待むなしき恋の熱情の「思い出」が、その奥に潜んでいるかのように。

しかし、誰もこのことを知らなかったし、おそらく知ろうとしなかった。

というのは、彼の心は悲しみを人に打ち明けて、安らぎを感じるといったような、

飾り気のない心ではなかったのだ、

抑えきれないこの悲しみがどのようなものであれ、

助言をしたり、同情の意を示してくれる友を求めようともしなかった。

また、誰もこの若者を愛する者はいなかった!―遠近より飲酒の輩を

大広間や木陰のあずまやに集めたが、

彼はこのような輩を饗宴のときの諂いの友、

酒食に群がるただ一時の心なき「寄食者」としていた。

そうだ! 誰とて彼を愛する者はいなかった―いとしき情婦たちも―

しかし、「女」の関心事といえば華麗と権力のみ、

そして、この華麗と権力のあるところに、移り気の恋の神エロスがその連れ合いを見出す。

おとめごたちは、まるで蛾のように、まぶしく輝くものに常に惹かれるもの、

そして、富の神マモンは最高位の天使セラフたちが望みを失うところに道を切り開いて進みゆく。

別れの言葉は言わなかったが、

チャイルド・ハロルドには決して忘れてはいない一人の母がいた。

そして、愛する一人の姉がいた、

しかし、退屈な巡行の旅に発つ前に会うことはなかった。

友達もいたが、誰にも別れを告げなかった。

だからと言って彼の胸は鋼鉄でできていると思ってはいけない。

僅かばかりのいとしいものたちを溺愛することはどういうことか知っている諸君は

別れることによって愚かしくも心を癒そうとして、

かえって心は打ち砕かれるということを心底から感じ取るであろう。

自分の館を、家庭を、遺産を、領地を、 自分が快楽を得たあの大声で笑う女たち — その大きな青い目、淡い金褐色の髪、そして雪白の手は 「世捨人」の「聖なる心」をも揺るがすだろうし、 長きにわたってこの貴公子の若き欲望を満たしてきたのだが — そして、あらゆる高価な葡萄酒を並々と注いだ酒杯、 快楽へと誘うかも知れないあらゆるもの、 これらのものを嘆息も漏らすことなく振り捨てて、海を渡り、 異教の国々の岸辺を通り、「地球」の中央線(赤道)を越えて旅行くことにした。

あたかも彼を故国より喜んで吹き送るかのように、 頃合いの風が軽やかに吹きおこり、乗り行く船の帆を張った。 故国の白亜の岸壁は、またたく間に視界から消え去り、 間もなく白波にとりまかれて見えなくなった。 その時、この若者は、おそらく、 放浪の旅に出たいと思ったことを悔いたかもしれない。 しかし、胸中に無言の思いは眠り、 他の者たちは坐して涙ぐみ、心なき突風に合わせて女々しく嘆き悲しめども、 この若者の口からは悲嘆の声一言たりとも漏れなかった。

しかし、「太陽」が海原に沈みゆくとき、 彼は竪琴を手に取り一見知らぬ者誰ひとり耳をそばだててはいないと思うとき 時折この楽器の調弦をして、教わったことのない旋律ではあるが、 掻き鳴らすことができたのだが — 今やその弦にはげしく指を走らせて、 朧に暮れる黄昏に、別れの曲を奏でた。

船は海面を飛びゆく白鳥のごとく帆を張って疾駆し、

故国の岸辺は疾く視界から消え去った。

このとき、この若者、住みなれた故国の空と海に向かい、『別れの歌』をうたったのだ。

この最後の連のあとに下記の短詩『別れの歌』が挿入され、祖国とニューステッド・アビィに対する惜別の思いが語られる。帆船はビスケィ湾を南下し大西洋に出て、ポルトガルのリスボンに向かう。第2連末行の「わが『犬』はその門に吠え叫ぶ」とは愛犬ボウスンを意識したもの

である。第3連1行目の「小姓」とは、ニューステッドの小作人の子供(少年)で、第3連から第5連までは彼とバイロンとの対話。第6連1行目の「従者」とはニューステッドの小作人の息子ウィリアム・フレッチャーで、バイロンがギリシアで他界するまで20年以上彼に仕えた人物。第

6連と第5連は、彼とバイロンとの対話。第9連5-8行の「恐らくわが『犬』は」ではじまる部分でもボウスンを思い出している。



Ι.

『いざ、さらば! わが故国の岸辺は 紺碧の海原のかなたに消えゆく。 夜風は嘆くがごとく吹き、白波は砕け、その音は轟き わたる。

\*\*\*。 | ではいたく啼き叫ぶ。 | おれらは海原に落ちゆくあの「日輪」を追い、 | 飛翔していくのだ。 | その「日輪」よ、わが「故国」よ、 | 彼と君よ、しばしの別れだ — 安らえよ!

# 2.

数時間もたてば、その「日輪」は起きあがり、 そして、「朝」が生まれ来る。 われは海と空を歓喜のうちに迎えるが、 もはやわが母なる「大地」には声はとどかないのだ。 わがよき「館」は住む人もなく、 その炉辺には人影もなく、 壁にはのび放題に雑草がまつわり生え、 わが「犬」はその門に吠え叫ぶ。

### 3.

「わが小さき小姓よ、ここに来れ! なぜお前は泣き嘆くのだ? 巨大な風浪の猛り狂うのが恐いのか? 疾風にお前は身震いするのか? 目から涙を振り払え、われらの船は速く、かつ強靱なのだ。 いかに敏捷なる隼といえどもこれほど快く飛翔することはできない。

#### 4

「風よ、耳を劈くほどに吹け、波涛よ高まれ、恐れはしないぞ。 だが、驚き怪しみくださるな、御主人さま、 心では悲嘆にくれているのです。 僕は父と愛する母を離れて 旅に出たのです。 今は友もなく、ただあるものは風と波、 そしてあなたと — 天の神。

#### 5.

「父は幸くあれと心から祈り そうたいして嘆かなかったのです。 しかし、母は、僕が再び帰り来るまで、 いたく愁嘆することでしょう。」―― 「よしよし、それでよいのだ。幼な子よ! そのような涙はお前の目にふさわしい。 もしお前のような正直な心を持っていたら、 この目から涙が乾くことはあるまいに。

#### 6.

「ここに来い、ここに、凛然たる従者よ、 どうしてそのように青ざめているのか? フランスの敵兵を恐れているのか? 疾風におびえているのか?」 「おのれの命惜しさに身震いしているとお思いなさる のですか?

御主人さま、私はさほど臆病ではございませぬ、 故国に残した妻のことを思えば 忠実なるものの頬は青ざめるのでございます。

## 7.

私の妻と子供らは、領地の境界となっている あの湖のほとりのあなたのお館の近くに住んでいる のです。

そして、子供らが『父は?』と尋ねるとき、 その母は何と答えるのでしょうか?」 — 「よいよい、わがよき従者よ、 お前のその悲しみを誰にも否定させはせぬ。 だが、心軽いこの僕は、 笑みを浮かべて故国を疾く去りゆくのだ。」

8.

「そのわけはこうだ。一体誰が妻、はたまた情婦の見せかけの愁嘆を信じようか? 先刻別れの時に、ぱっちりとした青い目に 涙を溢れんばかりに湛え流した あの新しき輩たちも、もうその目を乾かしている だろう。

そしてまた、過ぎ去ったよろこびにも、訪れ来ようとしている危険にも

悲しむことなどないからだ。

いと悲しきは、涙を催すもの何ひとつ残して来なかったことだ。

9.

そして、今や広漠たる海原にただひとり漂うのみ、 誰とて嘆く者なきこのわが身、 どうして他の者たちのために嘆かねばならぬのだ? 恐らくわが「犬」はただ徒にもの悲しげに吠え泣き、 やがては見知らぬ者に飼われることになるのだ。 そして、ふるさとにわれ帰り来る前、疾うにこの犬は 主人を忘れ、

会うことあらば、その場でわれを引き裂くであろう。

10

わが帆船よ、お前とともにこの白波立つ海原をよぎり、

疾駆してゆくのだ。

「故国」にわれを運ぶのでなければ、 いかなる国に行こうともかまいはしない。 来たれ、来たれ、紺碧の波涛よ! もしお前がわが目を慰めるものとならぬなら、 来たれ、砂漠よ、洞窟よ! わが「故国」よ、いざさらば。

ニューステッド・アビィには、バイロンの詩に縁のものがもう一つある。かつて館の南側(正面から見て右側)の芝地に古色蒼然とした老木「バイロンの樫」(the Byron Oak)と呼ばれるものがあった。1915年頃には枯死状態にあったために、さまざまな延命措置が講じられたが、ついには伐採された。1988年バイロン生誕二百年記念にバイロンの子孫リットン卿によって若木が植えられた。現在はその「子孫」が立っている。この木の「先祖」は、バイロンが母親と共にスコットランドからニューステッドに着いた時期に植えたものである。彼は、

『ニューステッド・アビィの庭園に立つ樫に寄せて。作者が9歳の時[原文のまま]に植樹した。先頃この木を訪れた時は腐朽状態にあったが、おそらく再び蘇らせることができないという状態ではなかった—1807年3月15日』(To an Oak in the Garden of Newstead Abbey, planted by the Author in the 9<sup>th</sup> Year of his age; this tree at his last visit was in a state of decay, though perhaps not irrecoverable—15<sup>th</sup> March 1807) という長い題名の詩を書いている。これも紙幅の関係で拙訳のみを紹介する。



若き樫よ! 僕がお前を地中深く植えたときは、

お前はこの僕より長生きをして、

悲しげに揺れているその大枝も、華やかに樹葉を身に纏い、

そして、やがてその幹には、蔦がまるで外套のように巻き付くだろうと思っていた。

幼少の頃、先祖伝来の土地で、僕が誇りを持ってお前を眺めた頃は、

そのような望みを持っていた。

歳月は過ぎゆき、僕はその樹幹に涙の水を撒く、

お前のまわりに雑草が生い茂っても、お前のその朽ち果てた姿を隠すことはできない。

僕の樫よ、僕はお前のもとを去り、そして、あの運命のときから、

僕の父祖の館にはよそ者が住みついている。

僕が成年に達するまで、僕には権限がない、

だが、この館を治めるのはよそ者、彼の怠慢によってお前は息絶えたのかも知れない。

ああ、お前は苦難に耐えられた — この今でさえ、少しだけ世話をすれば

お前の若い梢は息を吹き返し、その傷もゆっくりと癒える。

しかし、お前は人と愛情を共にする定めにはない。

なぜなら、見知らぬ者が感情を持つだろうと想像できる人がいるだろうか?

ああ、うなだれてはくれるな、僕の樫よ! 暫しの間、頭を上げてくれ。 この惑星[地球]がかなたの「栄光の輝き」の周囲を二回巡る前に、 お前の「主人」がその手を使って微笑みを教えてくれるだろう、

そして、幼児期の見習いの歳月が終わる。

ああ、生き続けていけ、僕の樫よ! 雑草の背丈をはるかに超えて、高く聳え立て、

あのようなものが、お前の成長を妨げ、お前が朽ちる手助けをする、

そのわけは、いつの時代もお前の胸には命の幼い種子が眠っているからだ、

そして、いつの時代もお前の枝はその美しさを見せてくれるであろう。

ああ、しかしそれでも、お前が成熟の時代を迎えるのであるのならば、

たとえ「この僕」が死の洞穴の中で死の床につくようなことがあっても、

歳月の日の光がお前の樹葉の上に輝きわたるだろう、

時の流れ、あるいは荒れ狂う冬の風に、傷つけられることなく。

お前の大枝は、何百年にもわたり変わることなく、

天蓋のように広がる樹葉のもとに横たえられたお前の主人の死体の上で、 軽やかに揺れるであろう。

そして、枝がこのように彼の墓を心地よく保護して、

生き残っている家主がお前の木陰でその身体を横たえるかも知れない。

そして、彼は自分の息子たちとこの場所を再び訪れて、彼らに小声で「もっと穏やかに歩きなさい」と言うだろう。 ああ! 間違いなく、決して僕は彼らに忘れられることはないだろう。 いつの世も死者の遺骸は思い出によって清められ崇敬されるものだ。 そして、ここでは彼らはこう言うだろう、「おそらくあの人は、 人生輝く花盛りの頃に、若き日の素朴な歌を滔々と歌ったのだ」と、 だから、ここで彼は眠らねばならない、そしてついに一瞬一瞬の時が、 「永遠」の一日の時間の中に消えていく日まで。

バイロンのニューステッド・アビィに対する思いは上 記に引用した詩に集約されている。この先祖伝来の館 については、長編詩『ドン・ジュアン』第13編第55連以 下の一部で「ノーマン・アビィ」(Norman Abbev)として語 られている。また『怠惰の時』(Hours of Idleness)、『ニュ ーステッド・アビィ哀歌』(Elegy on Newstead Abbev)、 『ニューステッド・アビィを去るにあたって』(On Leaving Newstead Abbev)、そして膨大な数の書簡の随所でも 語られている。これらの内容は全て同工異曲の感があ る。生涯バイロンが心のよりどころとしたのは、ホーマー やヴァージルの時代から彼と同時代までの詩人、歴史 家、哲学者たちの作品ばかりではない。彼が現実に接 して生涯脳裏から消えることがなかったものに、異母姉 オーガスタ、幼年時代のスコットランドのアバディーン、 そして先祖伝来の館ニューステッド・アビィがある。現 在、全世界37ヵ所に国際バイロン協会の支部がある。 バイロンが書いた墓碑銘や詩によって、人々はニュー ステッド・アビィの館と庭園を訪れ、ボウスンの記念碑 や「バイロンの樫」の前にたたずみ、遙かなる昔に思い を馳せることができる。没後190年余りの歳月を経て言 葉のみで人の心をとらえる人間は、そう多くはないので はなかろうか。

バイロンの詩の引用はすべて下記による。

McGann, Jerome J. ed. Lord Byron: The Complete Poetical Works. Vols. I, II, IV. Oxford: Oxford University Press, 1980-1991.

# <図版·写真>

巻頭口絵 Newstead Abbey(1880)

From public domainvectors.org (public domain) Epitaph from Wikipedia (public domain)

A Landseer Newfoundland dog from Wikipedia (public domain)

A Byron Portrait by Thomas Phillips in 1813. Wikimedia Commons (public domain).

Newstead Abbey, Cloister Garth, Wikimedia Commons (public domain).